

二次抄録 (800 字)

発熱患者に対するグリセリン浣腸処方を試み

くさかり小児科 草刈章

(医) 渡辺愛子 (看) 傅田留美子 (看) 廣重典子 (看) 嵯峨 睦
(事) 昆紗代 (事) 上地景子 (事) 草刈みすゞ (事)

はじめに：発熱は感染症の治癒促進に作用する。そのため解熱を図るべきではないが、頭痛や不穏、不眠などの症状には何らかの対応を必要とする。この場合、グリセリン浣腸 (GE) が奏功することが多く、その実態を調査した。

対象；2013年7月9日から8月18日に発熱を主訴として発病当日か翌日に受診した10歳以下の小児である。

方法；原則として0～5歳未満は30ml、5歳以上は60mlのGEを2個処方した。頭痛、腹痛などの症状が強い場合は院内で浣腸を施行した。家族の強い希望があれば解熱剤を処方したが、浣腸をして軽快しない場合にのみ用いるよう指導した。浣腸の実施状況やその後の経過については主に3～5日後に電話で確認した。

結果；該当患者は43人 (男：女=24:19)、GE処方のみは38人、解熱剤と併用が5人。実施状況は実施群25人 (院内7人、自宅で18人)、非実施群17人、不明1人であった。最高体温の平均値は実施群39.0℃、非実施群39.1℃、病名は感冒が30人、咽頭結膜熱、手足口病が各4人、咽頭扁桃炎、ヘルパンギーナ、肺炎の疑い、突発性発疹が各1人だった。

実施群の25人について、よく眠れた、元気になった、腹痛、頭痛が軽快したなどの改善効果が確認できたのは20人 (80%)、変わらなかった、悪化したのが5名 (20%) であった。非実施群での17人にその理由を尋ねたところ、元気があった、夜ねむれたなどが10人、自力で排便したが4人、特にないが3人だった。

考察；消化管と脳 (神経系) の起源は古く、6～7億年前の先カンブリア紀の刺胞動物出現まで遡る。以来、お互いの機能を相補うように進化してきた。高等動物に「脳腸相関」という機能が確認されている。浣腸は腸の機能改善になり、それは直ちに脳機能も改善する。

結語；発熱患者にGEを処方することは患者、家族を安心させるうえで有用な手段である。